

お茶の水女子大学附属学校出身の大学進学者は附属学校での 学びや経験を大学や社会でどのように活かしているか

加賀美常美代

お茶の水女子大学 基幹研究院

How do Ochanomizu University students and graduates from its affiliated schools utilize their school days' learnings and experiences in the university or society?

Tomiyo KAGAMI

Ochanomizu University; Faculty of Core Research Humanities Division

The purpose of this study is to clarify through qualitative analysis how Ochanomizu University students and graduates who had completed its affiliated high school, utilize their past learnings and experiences in the university or society and how the learnings and experiences have affected their value creation. An open-ended survey was conducted among 92 Ochanomizu University students and its graduates who had graduated from its affiliated high school from 2008 to 2017. KJ Method identified with 47 valid responses, containing 72 exemplifications of utilizing learnings and 87 instances of affecting value creation. The results show that students and its graduates recognized that they had utilized their knowledges, gained perspectives and academic skills in their university or social life. It was also revealed that their value creation and leadership skills had been affected by their school friends, teachers, educational environments or its consistent educational philosophy of autonomy and independence.

keywords : affiliated schools, utilization of learnings and experiences, value creation, educational philosophy

問題の所在と研究目的

2017年8月の国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議報告書では、附属学校の存在意義が問われている。大学がどのように附属学校と連携しているか、また、附属学校が大学にどのように貢献しているか、大学と附属学校園との協働のあり方を見直す必要があると指摘している（文部科学省,2017）。お茶の水女子大学は幼児期から青年期までの教育を人間発達の視点から捉え、同じキャンパス内で大学との連携の下で研究開発をしながら、カリキュラム開発や実践研究を進めてきた。また、附属学校を経てお茶の水女子大学に進学した学生については、2008年度から高大連携入試が行われているが、これについては入学前の参加者に関する報告がなされている（中里・安成,2015など）ものの、大学入学後におけるフォローアップ調査が十分行われているとはいえない。フォローアップ調査については、上述した有識者会議報告書でもその必要性は強調されてい

る。特に、附属中学校、附属高校で学んだどのような経験が大学に入学した後、大学や社会でどのように活かされているのか、また、その後の人生にどのように影響しているのかは十分解明されていない。さらに、その背景にどのような各学校における教育実践や価値観が作用しているかも不明である。お茶の水女子大学の附属学校の存在意義を考えるに当たり、大学と附属学校で継続して学び、学校生活を体験している附属学校出身者、つまり当事者の立場からその声を聞き、附属学校の価値を見出すことが必要不可欠である。

そこで、本研究では、附属学校出身者でお茶の水女子大学に進学し在籍している大学生および卒業生を対象に、附属学校での学びや経験がどのように大学または社会で活かされているか、また、附属学校における教育理念や価値観がどのように影響したかなど、個人の学びに附属学校の教育がどのように影響したか、その関連性を質的に検討することを目的とする。その現状と影響要因を解明することで、附属学校の教育が大学進学した学生の自己成長やキャリア形成、経験の活

用、価値観形成にどのように影響をもたらすかその関連性の詳細を見出すことができると考える。また、そのことによって、今後の大学と附属学校の連携強化のあり方を導き出す研究資料になりえるだけでなく、高大連携による教育がどのように大学や社会で活かされ、個人の生涯発達につながるかその可能性を示すものとする。

以上のことから、本研究における研究課題を以下の3点とする。1) お茶の水女子大学附属学校出身の大学進学者および卒業生は附属中学校、高校でどのようなことに関心を抱き取り組んできたか、2) お茶の水女子大学附属学校出身の大学進学者および卒業生は、附属学校で得た学びを大学および社会でどのように活用しているか、3) お茶の水女子大学附属学校出身の大学進学者および卒業生は、附属学校の教育、体験がその後の人生や価値観形成にどのように影響しているか、である。

方法

調査の概要

研究方法は、2008（平成20）年度から2017（平成29）年度に高大連携による推薦入試、AO入試、フンボルト入試、一般入試で附属校から進学した在籍学生および卒業生92名を対象に、郵送法による自由記述式の質問紙調査を行った。本調査は大学の倫理審査を申請し許可を得て行われた。調査対象者のプライバシー情報に関しては、質問紙の冒頭でデータ整理と分析の際には個人情報保護に留意し、個人が特定されることはないこと、また、回答は自由であり途中で回答したくなかった場合には回答しなくてもよいことを記した。また、本データは学術的な活動以外には使用しないことも示している。

質問紙調査は2017年7月下旬から8月下旬にかけて実施された。上述の対象者に配布した結果、47名が回収され有効回答数は47名であった（回収率51.1%）。対象者の内訳は附属高校のみの出身者は27名、附属中学出身者は20名で対象者の属性についてはTable1のとおりである。幼稚園から大学までは5名、小学校経験者から大学までは10名、中学校から大学までは5名で中学校経験者は合計20名であった。高校入学から大学への入学者は27名で、すべてが高校経験者で47名であった。現在の大学学部在籍者は27名であり大学院在籍者は3名であった。それ以外の卒業生17名は就職していた。

Table1 対象者の属性（47名）

出身校	中学出身者 20名、高校出身者 27名
入試形態	AO・フンボルト1名、一般入試8名、高大連携 37名 未回答1名
在籍状況	卒業生（就職）17名、卒業生（進学）5名、大学院（博士前期課程）4名、大学院（博士後期課程）2名、大学学部（1年生）5名、大学学部（2年生）4名、大学学部（3年生）3名、大学学部（4年生）7名
大学の学部	生活科学部 13名、文教育学部 22名、理学部 11名、未回答 1名
職業	会社員9名、金融1名、公務員4名、食品メーカー1名、未回答2名
年齢	18歳～20歳 10名、21歳～25歳 29名、26歳～28歳 6名 未回答2名
出身学校園	幼稚園5名、小学校10名、中学校20名、高校47名、大学27名、大学院3名
留学経験	あり 8名、 なし 39名
家族の附属校出身者	あり 3名、 なし 44名
配偶者	あり 44名、 なし 3名

質問紙の自由記述の質問内容と分析方法

質問紙の自由記述の質問内容は、1) お茶大附属学校出身の大学進学者および卒業生は附属中学校、附属高校でどのようなことに関心を抱き中心的に取り組んできたか、2) 附属学校の学びが現在どのように活かされていると思うか、3) これまでの人生を振り返って附属学校の教育やそこでの体験、友人形成は自分自身の人生や価値観にどのように影響があると思うか、である。これらの質問項目以外に、自己効力感、理想の人間像、レジリエンス、働き方、多文化協働について問う尺度項目を設け、5件法で回答を求め統計的分析を実施したが、本稿では紙面の都合上、自由記述の質的分析のみを行うこととする。

自由記述の回答については、中学校の関心事と取り組みは附属中学校卒業生20名の回答を分析対象とし、それ以外は47名全員の回答を分析対象とし、KJ法（川喜田，1986）を用いて分類、整理を行った。具体的には抽出した各データの内容に基づき、その内容を表す1つのラベルを作成した。自由記述内に複数の内容が含まれる場合、それぞれ別データとして切り分け、別のラベルを作成した。その後、内容の近いラベル同士を集めてグループ化し、そのグループの内容を反映したグループ名を付した。以上の一連の作業は検討を重ね、最終的に研究協力者（筆者の研究室の大学院生）2名と協議し決定した。

結果と考察

質問紙の自由記述の内容については、KJ法で整理・分類した結果をここでは述べる。分析の結果、本調査対象者の中学校における関心事と取り組みは計42件、高校における関心事と取り組みは計54件、附属学校の学びの活用は計72件、附属学校によるその後の価値観形成への影響は計87件が抽出された。これ

らの結果について、順に詳述し検討を行う。なお、以下では大カテゴリを【 】, 中カテゴリを[], 小カテゴリを< >, 単独カードを《 》として記す。また、分析対象となった各データの中心部分に下線を付す。

附属中学校ではどのようなことに関心をもち中心的に取り組んできたか

まず、附属中学校出身者20名を対象に附属中学校での関心事と取り組みを聞いたところ、42件の記述が得られた。それを分類し整理した結果、Figure 1のとおりとなった。まず、大カテゴリとして【学校行事における活動】8件が抽出された。その中に中カテゴリとして〔行事のまとめ役〕4件が見られた。それ以外に中カテゴリとして〔部活動における取り組み〕が7件、〔教科学習〕が7件、〔自主研究〕が7件に分類できた。

具体的に記述例を紹介すると、【学校行事における活動】の記述では、行事でのまとめ役として「体育祭リーダーや生徒祭でもリーダー経験をさせていただき力がついた」「部活動や行事の準備などすべてを両立し自主的に、仲間と協力して取り体育祭や生徒祭でも人をまとめる立場だった」また、「生徒会会計を中1の秋から中3夏まで活動した。自主自律の校訓のもと会計の資料作成等も任せてもらったので大変なこともあったが、自分の成長にもつながったと思う。会計を行なう上で、ほかの部活や委員会の生徒とも関わりを持てたこともよかった」というように学校行事によってリーダーシップの経験を培っていた様子が見られた。

中カテゴリの〔部活動における取り組み〕では、「部長として全てのことに主体的に取り組んでいた」「部活動は学年をこえて関わる機会があり、とても楽しく一生懸命取り組んでいた」「弱小だったX1部をなんとかしようと一生懸命だった。部長として練習や公演準備を見直したり、新入生歓迎会の方法を考えたりコンクールに出られないか掛け合ったりと同期と一緒に奔走した。小さい学校ならではだと思おう」「X2部に関心をもち中心的に取り組んできた。現在もある大学のダンスサークルで活動している」「X3部の活動では自分の技術を高めるために日々練習したり部員と協力して1つの曲を完成させたりと、毎日一生懸命だった」というように部活動を熱心に取り組む様子が見られた。

中カテゴリ〔教科学習〕では、日々の勉学として「朝の読書の時間に担任の先生がオススメの本を教えてく

れるのがとても楽しみだった」「英語の授業が始まるタイミングで帰国生学級の友人もできたことも有意義だった」「社会科の授業で仮定の国同士の挨拶などを決め、やりとりをした授業が印象的だった」というものが挙げられる。

中カテゴリ〔自主研究〕では、「中学1番の思い出は自主研究だと思う」「自分でテーマ設定から行ない、3年間を通して1つのテーマについて探求できた」「自主研究と発表の経験は大学入試や入学後も役立っている」というように、自主研究に熱中しそれが大学入学後も活かされていることが示された。このように、学校行事、教科活動、部活動、自主研究により「視野を広く持ち、幅広く色々なことに挑戦した」「精神的な成長を遂げた」「お茶中ならではの経験が得られた」という記述があった。こうした中学での経験が学びの中核となり成長していった様子が窺える。

附属高校ではどのようなことに関心をもち中心的に取り組んできたか

附属高校の関心事と取り組みについては47名を対象者において54件の記述が得られた。それらを整理・分類した結果、【正課による活動】31件と【正課外の活動】23件の2つの大カテゴリに大別された。【正課による活動】には中カテゴリに〔教科学習〕と〔アカデミックスキル〕が挙げられた。また、【正課外の活動】には中カテゴリの〔学校行事と部活〕に整理され、個別の部活動や文化祭、体育祭の取り組みがあげられた。さらに、小カテゴリに学校外活動も見られた。具体的な記述例を見ると、〔教科学習〕では「多岐にわたる幅広い学習（理系だったが、国語や社会科）も楽しんだ」「附属高校ではスーパーグローバルハイスクールとして総合的な学習の時間で7つの講座に分かれてグローバルな活動が行われている。私は情報技術と想像力という講座を受講しアプリ制作を行ったり、台湾研修で現地の情報技術を学び、最後にまとめ

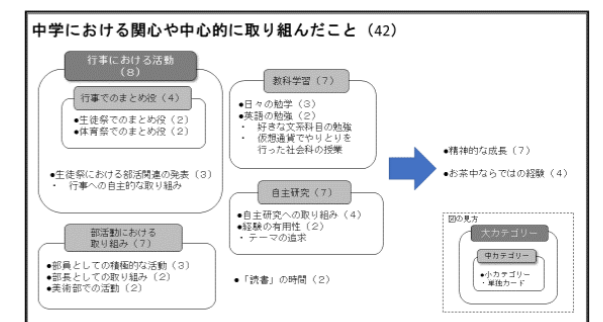


Figure1 中学校における関心や取り組んできたこと

として発表会をするといった活動を行った。受験勉強中心ではない、こうした幅広い学習に価値を見出すことができ積極的に取り組めた」「勉強全て全力投球でした。進路に悩んでいたのがむしろに勉強していた」「入学時は文・理の選択をしていなかったが、授業を受けるうちに理系の勉強が好きになり、数学、化学、生物に力を入れて勉強していた」「高校の授業で古文の面白さに目覚め、大学の講義（高大連携プログラム）にも出席していた」「高校はジェンダーや国際協力に関する分野に興味を持ち、その理解を深めていた」「高大連携の授業でお茶大の先生の講義を聞いたのをきっかけに日本文学を目指すことを決めた」というように、自分の関心を追究し進路につながる教科学習を深めていった様子が見られた。

〔アカデミックスキル〕では、「高校の間は国・社の授業がとくに好きで、シェイクスピアの映画化をみて、レポートを書く授業は印象に残っている。全体にレポートのある授業は、個々の考えの深まりとプライバシーが大切にされているように感じられて楽しく取り組めた」「現代社会の課外活動として友人たちと取り組み、普段の授業内では扱わない株式のことや、友人とのディスカッション、レポートの書き方などを実践的に学んだ」というように教科とアカデミックスキルが連動していることが示されている。

小カテゴリーでは、＜高大連携プログラムによる学習＞も抽出され、「メディアと人間との関係に関心を持ち、自由度のある課題を絡めて書いていた。また高校のうちから大学授業を聴講できたことはかなり視野が広がったように思う」「理系科目、特に物理に興味があり、高大連携の数学の授業に積極的に取り組んだ」というように、高大連携プログラムの受講も視野の拡大につながったようである。

【正課外の活動】の中の中カテゴリーの〔学校行事と部活動〕については小カテゴリーの＜部活動への取り組み＞

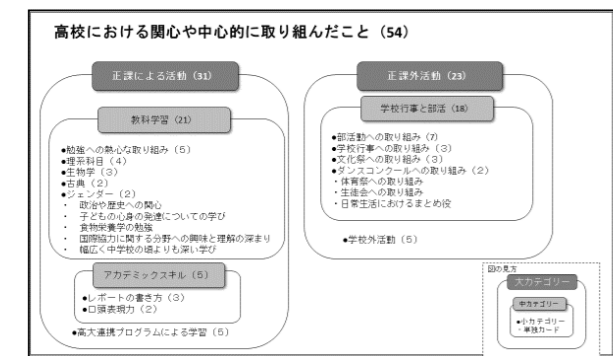


Figure2 高校における関心や取り組んできたこと

み>が最も多く「X4部に所属し部活動に重点を置く生活だった。都大会で金賞を取るなど週3、4回練習し力を入れていた」「中学からのX5部に加え、X6ボランティア部、X7同好会と3つを兼部して活動した」という記述があった。

また、＜学校行事への取り組み＞では「学校行事に打ち込み中心的なメンバーとして活動した」「ダンスコンクールや体育祭など行事にも積極的に参加した。ダンスコンクールの作品を創るにあたり、みんなでテーマを決め楽曲を探し編集し、フォーメーションを作りながら振り付けを考えていくという作業が芸術表現という観点で興味深く楽しみながら取り組んだ」というものであった。そのほかの課外活動にも言及しており、「1年生の時に参加した日経ストックリーグというコンテストに力を注いだ。現代社会の課外活動として友人たちと取り組み、普段の授業内では扱わない株式のことを実践的に学んだ」というもの、「環境問題に興味があり、毎年環境問題に関するプログラムに夏休みに参加してきた。高1の時はインドネシアでゴミ問題について、高2の時はベトナムで大気汚染問題について、海外の学生と共に解決策を考えた。高3の時は日本に訪れたアジア13カ国の学生と共に、環境問題全般についてそれぞれの国の事情を踏まえ上で話し合うことができた。これらの経験でグローバルな視点を持ちながら考えることの大切さを学び、大学における環境問題に関する学びにも活かされていると感じている」という記述があった。このように学校だけではなく学校外においても活動を広げ、グローバルな問題意識を深め社会への発信をしている者もいた。

こうした活動においては、リーダー役を担っていたことも言及された。たとえば、「(中学でも)高校でもみんなをまとめるポジションで周りのみんなと一緒に協力して何かをやり遂げたり、主体的に行動することで自分も楽しく過ごせると日々実感していた。勉強も大変だったが何よりも毎日とっても楽しかった」というように、部活動や学校行事、学校外の活動にも熱心にリーダーとして取り組む様子が見られた。

附属学校の学びが現在どのように活かされていると思うか

附属学校の学びが現在どのように活かされていると思うかについて、47名の対象者において72件の記述があったが、それらを整理分類した結果、Figure3のとおりとなった。

分析結果は、大カテゴリーとして【授業による多様な

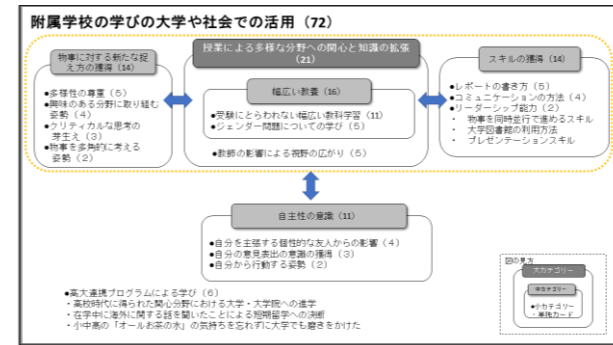


Figure3 附属学校の学びの大学や社会での活用

分野への関心と知識の拡張】(21件)が挙げられる。その中に中カテゴリーとして〔幅広い教養〕が挙げられ、受験にとらわれない教科学習が記述されていた。たとえば、「文系理系に分かれることなく全科目を学んだことで、自分の専門に限らず興味関心を幅広くもつことができた」「大学では理系に進んだが、附属高校の授業を通して国際問題や社会問題、ジェンダーなどグローバル社会で生きていくために必要な教養や問題意識をもつことができたと思う」「幅広い教養と自分と異なる考えを持つ人に対する理解は、社会でコミュニケーションを円滑にする力として活かされている」「音楽の授業ではそれまで関心なかったミュージカルやクラシックコンサートなどと触れ合う機会が多く、教養が深まり今でも良く観に行くようになった」「世界史や日本史、地理などでは美術館や博物館、海外旅行に行ったときなど、プレートに書いてある説明文を読むと、必ず高校の授業で学んだことが書いてあり理解しやすく、今でもとても役に立つことが多い」「附属高校では文系理系に分かれず、3年まで受験に関係ない教科を履修していた。現在、大学では自分の専門以外の分野の授業をいくつか受けているが、高校で多くの教科を学習していたため、授業内容が自分の体験・知識と結びつくことがよくある」「課題解決のための案を考える際、高校で学んだことが役立つこともあり、幅広い教育が重要だと感じた」「基本的に自律で自分から行動する習慣を身につけられたため、大学・社会では積極的に活用できていると思う」「教科書のレベルを超えて原理などからしっかり勉強できたことは大学学部1年、2年での授業理解につながった。また、受験科目に限らずたくさんの教科に触れたことは、多くの人と関わる中での様々な話題に対応することにつながり、私自身の教養となっている」「化学や生物などの科目が大学の専攻に活かされているのはもちろん、教養基礎数学IIIで学んだ統計も大学

の専攻に必要なため、高3で学べてよかった」「高校在学中に海外に関する話を多く聞いた影響からか、大学に入り短期留学案内を見た時にすぐに興味を持ち、留学に行く決断ができた」というような記述があった。このように幅広い教科学習が大学の専攻だけでなく自身の興味関心を広げ教養を高め、海外留学の即座の意思決定にまで活かされているとの認識を持っていた。

これらは優れた教師により視野が広がられたという言説からも教師の影響が関係しているようである。たとえば「友人や先生方から刺激を受けた」「幅広い内容を優れた先生方から学ばせてもらったことは、その後の学びや広い興味に活かされていると思う」「実験や実習や発表などしっかりと取り組ませてもらったこと、先生方が楽しそうに授業をしてくださった姿が印象に残っている」「世界史など特に社会系の科目では先生の独自の資料や映像などを元に授業が進められたので、より視野が広がった」「高校の先生の授業が面白く、それぞれの学問の奥深さについて気づかされた。大学の専門分野ではないが、様々なことに対する興味の種は高校の授業にあったように思う」ということから教師の影響が窺える。

次の中カテゴリーである〔物事に対する新たな捉え方の獲得〕は14件抽出されたが、その中の小カテゴリーには＜多様性の尊重＞(5件)が見られ、「互いの個性を尊重しあい、自分とは異なる価値観を抵抗なく受け入れることのできる力がついたと思う」「幅広い教養と自分と異なる考えを持つ人に対する理解は、社会でコミュニケーションを円滑にする力として活かされている」「人の考え方や生き方には多様性があること、また多様性を尊重することの大切さを学んだ。大学や社会で様々な人と交流し仕事をしていく上で、自分の考えだけにとらわれずに広い視野を持って取り組むことができている」という記述があった。

＜興味のある分野に取り組む姿勢＞(4件)としては「自分の専攻に関わらず、興味のあることは考え続けようと思うようになった。現在、プログラミングの仕事をしているが、翻訳ソフトや文体の分析など、言語の研究に活かせるプログラムが作れないかと思いついたことにはほとんど取り組む精神など、どれも大学や社会で役に立つことを学んだ」「私がお茶の水で身につけたことの1つ目は、興味を持ったことに積極的に取り組み、追求し、学びを得る姿勢だと思える。常に友人たちの視点や思考力から刺激を受けてい

たので、皆と切磋琢磨するうちに常に積極的な姿勢が身についた。このことは大学での学びにも直接的に結びついている。2つ目は、高校、大学とも女子校であることからジェンダーの問題についてよく考えるようになった」「高校での学習を通して『学ぶ』ということを楽しめることができるようになったと思う。元々勉強は得意な方だったが、さらに好きだと気づいた。これから社会人になるが、仕事をしながら色々なことを自発的に学習していきたいと思うようになった」

次に＜クリティカルな思考の芽生え＞(3件)では、「人との関わり方や社会の見方はほとんど高校時代に培われた。世界史や現代社会で事象の説明だけでなく、それを自分なりに評価するよう促してくれた」「情報をうのみにしないことや何事も一度は疑うこと、自ら思考することを学び、それが常に活かされていると思う。特に自分の頭で考えるということは学業においても進路選択においても重要であると思う」という記述があった。

＜物事を多角的に考える＞(2件)としては、「附属高校での授業が自分で考える課題や自由度の高い内容であったため、そこで身についた多角的な考え方は今も非常に役立っている」という記述があった。

附属学校の学びの活用は中カテゴリの〔スキルの獲得〕(14件)にも現れている。その中の小カテゴリ＜レポートの書き方＞(5件)では「読書レポートが大学でレポートを書くときの基礎力を大きく培ってくれたと思っている。原稿用紙の使い方から文献の使い方まで丁寧に指導していただいた」「高校1年生で大学図書館の利用方法を教えてもらっていたので、比較的スムーズに図書館を活用できた」「レポートの書き方(構成と引用など)は、大学で活かしている」という記述があった。

小カテゴリの＜コミュニケーションの方法＞(4件)では、「国語系の科目では、テキストの解釈についてクラスメイトと話し合ったり、自分で考えたりして深められたことが刺激的だった」「人と接する仕事なので学んだことが活かされている」という記述があった。＜リーダーシップ能力＞(2件)では、「大学でもX8サークルに所属しパートリーダーを務めていた。高校での経験を人に伝えより大規模の団体をまとめるという経験につなげることができた。また女子しかいないことや自由な校風から、何でも自分で決断することや自主性が身についたと思う」「イベントが盛りだくさんの高校生活だったので、同時並行で様々

なことを進めていくスキルがついた」と記していた。

中カテゴリ〔自主性の意識〕は11件抽出された。その中の小カテゴリの＜自分を主張する個性的な友人からの影響＞(4件)には「周囲が自分の意見を主張できる人ばかりで、とても刺激を受けた」「高校の間に自分の関心を見つけることができ、それがそのまま大学や大学院進学後の進路につながった。また理社すべて履修したことで、文理の別を問わない友人ができたことは、それぞれの進路に進んだ今、互に刺激し合い、視野を広げ合うことのできる貴重な機会をもたらしてくれた」「海外の大学に進学した友人の影響で、活躍できるのは日本国内だけに限らないのだと気づくようになった」という記述があった。

＜自分の意見表出の意識の獲得＞(3件)では、「学友が自分の意見をはっきり伝える人が多かったので、自分自身もそのような性格になった。社会人になっても周りに流されなくて、常に自分の考えを持ち続けるようにしている」「周りに迷わされず行動し、しっかり意見を言う仲間のおかげで女子としてなめられることなく、自身のやりたいことを貫くことができるようになった」というように自己主張をすることの重要性を認識し、そのことが社会で活かされていることを示した者もいた。＜自分から行動する姿勢＞(2件)では、「自由には責任が伴うということを日々実感していたので、自分のことは自分でしっかり考え、責任を持つという意識は今も周りの人よりも強いと思う」「高校では自分で考えて自分で動くということが多く求められたと思う。大学や大学院における研究の中でも言われたこと以外のことをどれだけできるかが求められていると思うので、そこに活かされていると思う」という記述があった。

このように、附属学校で培った幅広い分野の学びに対して、対象者は自身の知識や教養となって大学や社会で活かされていること、物事に対して日常生活場面で批判的な観点や多様な捉え方ができることで活かされていると認識していた。また、レポートや論文作成、コミュニケーション、リーダーシップ力などアカデミックスキルの獲得によって、それが大学や社会で役に立っていることも示していた。このような認識の根底にあるものは、附属学校での自主自律の精神であり、それは価値観や意思決定や行動の基盤として意識されていたといえる。

附属学校の教育や体験は、自分自身の人生や価値観にどのように影響があるか

それでは、附属学校での学びや経験が現在、自分の人生や価値観にどのように影響があるだろうか。全部で87件の自由記述を分類整理した結果、Figure5のとおり、大カテゴリ【人との出会い】(35件)と【教育環境】(33件)の2つに大別された。

【人との出会い】では、中カテゴリの〔友人関係の形成〕(23件)と〔先生との出会い〕(9件)の2つが抽出された。〔友人関係の形成〕には小カテゴリの＜刺激を受ける友人との出会い＞(8)

＜自分を持っている友人との出会い＞(6)、＜仲間との出会い＞(4)、＜生涯の友人関係の形成＞(3)＜魅力的な友人との出会い＞(2)に分類できた。

＜刺激を受ける友人との出会い＞の中では「高校から大学まで、同じキャンパスで過ごした友人とは今もつながりを持っていてと思う。高校では社会の中でアッパーな層の学生が多いように感じていた。皆、恵まれている環境に甘えず、向上心を持っており刺激を多く受けた」「附属学校は中学も高校もどちらも個性的で、それぞれ何かに興味をもっている友人に出会うことができた。何かを極めようとしている人たちに出会えたことで、自分自身もたくさんの刺激をもらうことができ、共に高め合おうとすることにつながったと思う」という記述があった。

＜自分を持っている友人との出会い＞では「自分を持っている友人が多く、その中で3年間すごせたことは、自分のモチベーションを高く保つために非常に良かったと感じている」ということを挙げていた。

＜仲間との出会い＞では「それぞれが自分の道で輝いている仲間に出会えたことは、狭い世界で他人と自分を常に比較し、小さくまとまりがちだったそれまでの対人関係を大きく変えたと思う。人間的に大きくなり外向的な性格になった」という記述があった。

＜生涯の友人関係の形成＞では「個性的な友人に囲まれながら、自由でのびのびとしていた空間で過ごすことができたので、自分らしくしてもよい、自分を絶対に受け入れてくれるという安心感があった」「一生の友人ができたこと、自分を表出することが出来るようになったことは、私の人生に大きく影響していると思う」というように、安心して自分を受容してもらえ友人や仲間たちに出会えたことを評価している者もいた。＜魅力的な友人との出会い＞では「お茶高の友人たちはみんなキラキラしていると思う」という記述があった。このように友人からの刺激を得、自己成長

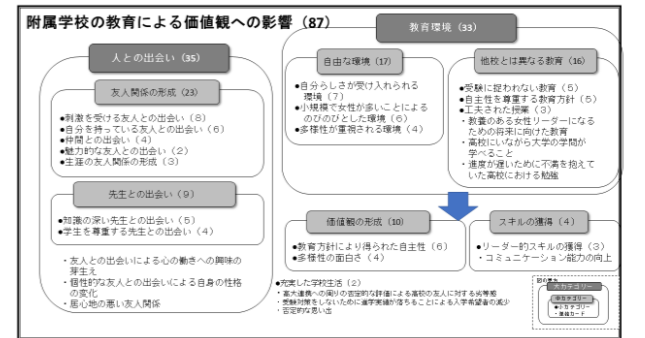


Figure4 附属学校の教育による価値観への影響

をしたこと、対人関係の広がりから自分の性格や人生を変化させたという人生への影響を指摘した者もいた。

中カテゴリの〔先生との出会い〕(9)は小カテゴリの＜知識の深い先生との出会い＞(5)、＜学生を尊重する先生との出会い＞に分類できた。＜知識の深い先生との出会い＞では、「様々な個性豊かな先生方のレベルの高い授業を受けられた」「お茶高の先生方は深い知識もたくさん持って敬意している」というような記述があった。＜学生を尊重する先生との出会い＞では「生徒に親身になって教えてくれたり、相談にのってくれたりした」「各教科の専門性の高い先生方に出会えたことが附属高校に通えて幸せだと感じる最も大きな理由の1つだ。知り合いにも自分の子供もぜひとも紹介したい、通わせたいと思えるような経験ばかりだった」「お茶高の先生方は個々の関心を本当に尊重して下さった。高校時代辛かったことなども、今ではすっかり財産で後からその価値に気づかされることばかりだ」「良い先生、良い学校に出会えてよかった。また、附属高校の先生は進路選択を自らの意志で決めるように促してくれる。決して実績を重視しない、生徒のことを第1

に考える良い学校です」というように、知識の深い個性豊かな教師のもとで質の高い授業を受けることができたこと、生徒の意思を尊重し親身に進路指導してくれた教員を誇りに思っていることが認められた。

大カテゴリ【教育環境】(33)については中カテゴリ〔自由な環境〕(17)と〔他校とは異なる教育〕(16)に分類できる。〔自由な環境〕は小カテゴリの＜自分らしさが受け入れられる環境＞(7)

＜小規模で女性が多いことによるのびのびとした環境＞(6)＜多様性が重視される環境＞(4)に分類できた。

＜自分らしさが受け入れられる環境＞では、「附属

高校は互いの個性を認め尊重し合う寛容な雰囲気があった。高校生の時期に自分らしさを受け入れてもらえる環境に身を置いたことで、力を抜いて生きられるようになった」「友人や先輩、先生方と関わる中で、身近なロールモデルにも沢山出会えたことは、生涯の財産だと思う」「少人数、女子校である特殊さゆえだと思うので、今後もこの校風を大切にしていっていただきたい」「中学では自主研究や生徒祭の自主グループ、高校では一風変わった部活や文化祭のTea Partyなど、自分の好きなことややりたいことに自信を持って取り組む環境があったと思う。その中で方法を考えたり、お互いの考えをぶつけ合ったりして自分たちで何とかする力を養えた。そのような校風だったから、それぞれの生徒がクラスでの立ち位置やキャラなどとは関係なく仲が良かったし、居心地が良かったのだと思う」という記述があった。

＜小規模で女性が多いことによるのびのびとした環境＞では、「附属高校の小規模で落ち着きがあり、芯の通った女性が多い雰囲気の中で3年間過ごすことで、中学(公立)まで控えめに変に目立たぬよう静かに学校生活を送ってきたつまらない生活を一変させることができた」「女性がのびのびと切磋琢磨しながら成長できる環境が思いのほか、自分の肌に合っていた。本当に信頼できて一生付き合っていきたい友人もたくさんできた」という記述があった。＜多様性が重視される環境＞では「根が真面目で多様な価値観を持った友人に囲まれて学んだことで、私自身も広い視野を身につけることができたと思う」という記述があった。

〔他校とは異なる教育〕では小カテゴリ＜受験にとらわれない教育＞(5)、＜自主性を尊重する教育方針＞(5)、＜工夫された授業＞(3)に分類できた。＜受験にとらわれない教育＞では、「附属学校は中学も高校もどちらも個性的でそれぞれ何かに興味をもっている友人に出会うことができた。そのことで自分自身もたくさんの刺激をもらうことができ、共に高め合おうとすることにつながった。附属学校の教育も他校のものとは違った特色があり、そこで学べたことがその後にもつながっていると思う。中学校も高校も非常に充実した日々を過ごせ楽しめたのでよかった」「同級生や先輩後輩について、中学は共学だが、女子が多く女子としてはのびのびと過ごせた。高校は本当に良かった。全員が個性を認めながらまとまるときはまとまる。集団の中での過ごし方は全て高校で学んだ」「附属高校は進学校でなく『教育実習・教育実験・実践す

る学校』であるという考えのもとで単なる詰込みの受験勉強ではなく、考えさせられる授業や教養基礎など伸び伸び学ぶことができたのは、人生において財産になっていると思う」「自分なりに勉強はしっかりやってきたが、やはり一般的な受験生に比べれば、落ちついて余裕のある学生生活を送ることができたと思う。自らのやりたいことができ、よき10代を過ごせた」「勉強にも体育祭などの行事にも何事にも全力で取り組める、お茶高にはそんな環境が整っていると思う」ということが示された。

＜自主性を尊重する教育方針＞では「附属高校は総じて『自主性』に重きを置いた教育をしていると思う。また好きなことをのびのびやれる環境だった。そのため良くも悪くも、我が道を行く性格になったと自覚している。私は博士課程に進学し好きな研究を深めている最中だが、周りに何を言われてもあまり気にせず、好きなことをしているなど思っている。何か1つのことに強みを持ち、それを高めていくという生き方も1つの方法かなと前向きにとらえている」という言説があった。

＜工夫された授業＞では「教育については先生方が個性あふれる方々で、何かを覚える学びではなく興味をもって学べる工夫がたくさんあり、とても楽しく勉強できた」「附属学校を出て大学から色々な人と関わるようになったことで、これまでの環境がどれだけ優れた教育を受けてきたか、先生方やカリキュラムがどれだけ変わったものであったか(良い意味で)感じるようになった。本当に幼稚園から通えたことを誇りに思っている。あえて言うならば、私の全てを作ったと言っても過言ではありません」と述べられていた。

さらに中カテゴリ〔価値観の形成〕(10)、〔スキルの獲得〕(4)が見られた。〔価値観の形成〕には＜教育方針より得られた自主性＞(6)＜多様性の面白さ＞(4)に分類できる。まず、＜教育方針より得られた自主性＞には、「自主的に何にでも取り組めるような環境があったことがとても刺激的で、毎日楽しく充実した高校生活だった」「自主自律の精神のもと自分で考え主体的に責任をもって行動できる人が多かった」「中学、高校とも自主自律の自由な校風であったことは、自分で考えて行動する力をつけさせてくれたと思う」「自分の価値観、考え方の根幹は高校での様々な体験に基づくものだと感じている。自主性に任せられた生徒会活動や、受験などにとらわれない本質的な授業によって自律した考えを持つことができた。また、周囲の友人も自律的な考えを持つ生徒ばかりだっ

たことも大きい。高校生活によって、たくましい人間に成長できた」と述べていた。

＜多様性の面白さ＞では「中学・高校とも学校の友人もみんな伸び伸びして、それぞれが自分らしさを出せていた環境だったので友達と話すことがとても楽しかった。様々な価値観に積極的にふれ合っているという姿勢はこの中で得たと思う」「多様性と自由を尊重する気風があったことが何より有難く、好きでした」という記述があった。

中カテゴリの〔スキルの獲得〕(4)では小カテゴリ＜リーダー的スキルの獲得＞(3)が挙げられた。「いろいろなリーダーシップの経験から自分ではできるという自信をつけたので、これは大きいと思う」「自分のことは自分で決めるようになった。時間のやりくりがうまくなった。(＝柔軟さ、臨機応変能力が身についた)「行事活動におけるリーダー的役割を通したコミュニケーション能力が向上した」というように行動するに当たりリーダー的なスキルをつけたと言及している。以上のように、附属高校の経験では友人や先生との出会いや自由でおおらかな教育環境のもとで、自律した価値観を身につけ、リーダー的スキルを得たといえる。

そのほかに特筆すべきこととして、高大連携プログラムで大学の講義を聞きに行くことができ、進路選択に貢献したことが挙げられる。たとえば「高校にいながら大学での学問が学べること、上級生を見て良い刺激を受けられるのは附属ならではの特徵だと思う。同じキャンパスにすべての学校があるとゆったりとして落ち着くようなアットホームな感じがする。自由に物事を考え人に相談するというスタイルを高校から学んだ。良い先生、良い学校に出会えてよかった。また、附属高校の先生は進路選択を自らの意志で決めるように促してくれる。決して実績を重視しない、生徒のことを第一に考える良い学校です」ということが言及されていた。

まとめと総合的考察

以上のとおり、研究課題1をまとめると、本調査対象者は附属中学校では学校行事における活動、教科学習、部活動、自主研究に取り組み、お茶の水女子大学附属中学校(お茶中)ならではの経験を積み、精神的な成長を遂げていることがわかった。さらに、附属高校では教科学習においてより深く熱心に勉強に取り組み、アカデミックスキルを学び、幅広い分野に関心

を持ち教養を身につけていたことが窺える。学校行事や部活動でも積極的に取り組みリーダー役を担っていた。またグローバルな社会に目を向け学校外でも活動し積極的に発信していた例もあった。

研究課題2の大学や社会における附属学校の学びの活用については、授業による多様な分野の幅広い深い学びを通して教養が身についたことで、専門以外の分野についても関心を持つことができ、それが日常のいろいろなところで活かされているといった言説が多かった。また、大学や社会ではレポートの書き方やコミュニケーションの方法、リーダーシップ能力の発揮など学業や対人場面で活かされていると述べていた。一方、そうした授業や友人とのかかわりの中で、多様性の尊重、関心のある分野を深める姿勢や批判的なものの見方、物事を多角的に考える姿勢が身につけられたということも挙げられていた。こうした背景には教師の影響により視野の広がりを獲得したことや友人たちとの関係の中で自己表明の大切さや自分から行動する姿勢を学んでいたものといえる。

研究課題3では附属学校の教育、体験がその後の人生や価値観形成にどのように影響しているかについて尋ねているが、人との出会い、特に友人や教師との出会いに影響され、魅力的で個性的な友人から刺激を受け、深い知識をもち学生尊重をしてくれる教師の重要性について述べていた。教育環境については自分らしさが受容され、自由でのびのびした、受験にこだわらない、自主性を重視した教育環境のよさが挙げられていた。こうした友人、教員と環境の中で得られた自主自律の精神は、附属学校出身者の価値観として形成されていたことが明確になった。

以上のことから、まず、附属学校園の出身者たちは、自分で考え自分で自発的に行動するといった自主自律の精神が価値観形成に深く影響していることを自覚していた。幼稚園からの出身者は「幼稚園から通えたことを誇りに思っている。私の全てを作ったと言っても過言ではない」という言説や中学校出身者の「自分の人生や価値観の基礎をお茶の水が作った」という言説からも理解できる。これは幼稚園から大学まで自由でのびのびとした環境で、一貫した自主自律、広い視野という教育理念が内面化し、それによって個人の価値観が形成されたものといえよう。

次に、附属学校で学んだことが活用されている場面は、大学での文献検索やレポート作成、プレゼンテーション能力などアカデミックスキルを挙げる者が多かった。特に「中学校から自主研究や授業の中で発表

やプレゼンテーションを行なう機会が多く、そこで培ったプレゼンテーションの技術や話し方、レポートの書き方は、その後の高校、大学生活の中でも大きく活かされた」と中学校出身者が述べているように、中学校での学びが高校、大学と連動して活かされていることは附属学校ならではの継続した学びの強みであろう。学習や研究のスキルは、学習する際の基本となる方法論を習得させることであり、社会に出てからも活用可能性、応用可能性がある。大学や職場においても新しいアイデアを現実にするためには、情報収集しそれをまとめ、文章化し発信していく力が必要である。また、現代社会では転職、転職、結婚、出産、育児といったライフイベントで働き方を変更する場合もある。そうしたどんな状況、どんな場においても、個として生涯を通して学び続ける能力、技能を身につけることが重要であることを示すものといえよう。

また、附属学校の在学中に高大連携プログラムや大学の講義に参加する機会を持つことが進路選択の際に重要な要因であることが示された。高大連携の趣旨は高校と大学が教育資源を連携しながら行う教育活動(勝野,2004)であるが、こうした同じキャンパスの中で、大学の研究者にじかに触れ専門分野の教育研究を体験できる機会が重要であり、高校卒業後の進路選択に影響することが示唆された。こうした自己の将来の可能性を現実的に検討し追求できるのも附属学校と大学の連携強化として必要なことであろう。

さらに、附属学校における友人形成や教員との出会いなど生涯を通じた人的資源の獲得が挙げられる。学校では仲間や教員から多様な刺激を受け、自分らしさが容認される場を与えられたことで、自己成長している様子が見られた。「友人や先輩、先生方と関わる中で身近なロールモデルにもたくさん出会えたことは、生涯の財産だと思う」という言説からも裏打ちされる。こうした学校時代に形成された人的ネットワークが将来にわたって繋がっていくことは、附属学校の長所といえるものであろう。

最後にグローバル女性リーダーとしての可能性について言及する。現在、お茶の水女子大学が掲げるグローバルリーダーという社会的・教育的使命は、中学校教育、高校教育でも意識的に行われている。大学との連携として、附属中学校では留学生との交流授業を頻繁に行ったり、大学の研究者のキャリアを学びに研究室訪問をしたりしている。また、文部科学省の研究開発校の指定を受けコミュニケーション・デザイン科として、表現方法を活用し効果的に発信する方法を学

ばせて、仲間と協働しながら解決困難な社会的課題に取り組み、「自然環境」「震災復興」「人権」といった探究型の活動に発展させている。附属高校ではSGH(スーパーグローバルハイスクール)として国際社会における解決困難な諸問題などを掘り下げ、研究活動を深めている。こうした附属中学校、附属高校の教育を経て大学に進学した学生や卒業生は、海外協定校との交換留学を積極的に選択する者や海外の就職も視野に入れる者もあり、グローバル女性リーダーとしての自覚が芽生えているといえよう。

なお、本研究の限界について言及すると、本調査の対象者は過去10年間のお茶の水女子大学進学者で、回答はそのうちの半数で肯定的な意見がほとんどであった。わずかであるが批判的な意見もあり(Figure4の単独カード参照)、回答しなかった残りの半数の対象者は不明であるため、過度な一般化は避けたい。また、今回の調査の量的分析は上述したとおり、他稿に譲ることとする。今後の課題は、お茶の水女子大学以外の大学に進学した附属学校園出身者を対象とした意識調査についてはまだ実施されていないため、同時期の他大学に進学した対象者を含めて検討するなど、多様な観点から継続してフォローアップ調査を行う必要がある。

付記

本研究は平成29年度お茶の水女子大学附属学校園の連携研究助成により実施された。調査に協力して下さった同大学附属学校園出身の大学生、卒業生の皆様には心より感謝申し上げます。調査の実施にあたっては同大学の倫理審査委員会の承諾を得た。なお、本稿の著者は平成27年度から平成30年度までお茶の水女子大学附属中学校校長を兼務している。本調査の入力と整理にあたっては著者の大学院研究室の和田薫子さん(博士後期課程3年)、小宮山百合子さん(博士前期課程1年)に多大なる協力をいただいたことを申し添え、御礼申し上げます。

参考文献

- 勝野頼彦(2004)『高大連携とは何か—高校教育から見た現状・課題・展望—』学事出版。
 川喜田二郎(1967)『発想法—創造性開発のために』中央公論社,11-31。
 文部科学省(2017)「教員需要の減少期における教員養成・研修機能の強化に向けて—国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議報告書—」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/077/index.htm (平成30年2月20日閲覧).
 中里陽子・安成英樹(2015)「高大連携活動に参加する高校生の特徴についての検討」『高等教育と学生支援:お茶の水女子大学紀要』第6号 45-52.

2018年2月24日 受稿